

シベリア抑留の真実

和歌山県 出口 為治郎

入隊

私が母親に連れられて、日高平野で当時和歌山六十一連隊と大阪八連隊の兵隊さんたちの大演習が行われたのを見に行ったことを、いまだに子供心に覚えておられます。私は、紀州の中心部日高郡野口村の小さな農家に生まれ、兄弟は十二名で私は五人目。

昭和六年野口尋高小学校に入学、卒業後すぐ、大阪天満の造幣局に採用され、戦争がますます激しくなってきたが、若い我々にとって月に二日ぐらいの休日です。昼夜交代十時間労働で働いた。昭和十七、八年ころから戦況が急迫、食糧難が一番こたえたが、戦地の兵隊さんに白い飯を食ってもらおうと麦飯やいも飯を食って、国民は月月火水木金土と歌にまであるように働き続けた。

昭和十九年度まで造幣局で働き、当年、徴兵検査にて第一乙種合格として、二十年正月の雑煮で祝っていただき、同年配三人で紀勢線と佐駅を出発、九州博多港近くの学校に集結させられた。ここで三日間お世話になり、軍服に着替え、真夜中、玄界灘を朝鮮半島釜山港に出発した。生まれて初めて大陸に足を踏み込んだのであった。

目的地は満州国ハルビン郊外第十八野戦兵器廠第二六三五部隊の教育隊にと、朝鮮半島に上陸して初めて報告を耳にしたのだった。さすがに暖かい紀州から来た自分にとって冷たさが身にしみたが、あこがれの満州だったので満足の気持ち、どんな苦労でもやる覚悟はできていた。半島の真ん中を北へ走る列車は五十両ばかり、千五百名だと言われていた。一昼夜走る車窓からの雪景色、同僚たちと珍しげに話し合いながら、こんな雪の中で三カ月の教育を受けなければと言う同僚もいたが、自分にはなんのその、その覚悟はできていたので、何とも思わなかった。

いよいよハルビン駅に到着。同僚たちとうれしい表

情で門前に到着。歩哨の員数点検終了後、宮庭に整列。庭内は雪で一メートルばかりでも先輩たちの整地できれいにできていて、上官の迎え、訓辞、約一時間くらいで終わった。中隊の気配り等も準備ができていたためか、一個中隊で四班に分かれて、自分は二班だった。

まず当日は班内の説明。初年兵は古兵上等兵たちの教えに従って忙しい一日を過ごした。二日目、起床ラッパが鳴り響くとともに全員床を上げ、身の整理。班内は朝食の始まるまでの忙しさ。食事を済ませますが早いか、班内の整頓、本日の始まるの班長殿のお話に引き続き、上等兵殿、古兵殿と、今日の行動について教えてください。ぼつぼつと初年兵教育の厳しさが見えてきた。三日、四日と日の暮れるのがわからず、軍隊ってこんなところかなと頭にしみ込んできた。

一番つらかったのは夜八時、一日の業務が終わった後一時間ばかり、古兵から、貴様たちの行っていることとなつたらんと、小さなことまではじくって説教をするだけではなく、上靴ピンタで殴る。しまいに同僚同

士で殴らせるありさま。一カ月くらい過ぎ、雪の訓練。広い野原に朝出発して夕方まで班内にいるより気分はよかったが、冷蔵庫に入っているのと同様で、暖かい内地から来た我々にとっては、三カ月といえども寒さに弱い身だからつらかった。団体の共同生活だから行けたのであり、天皇陛下のため、お国のための意志がかたまっていたからこそと、今もって思う。

内地ではもう春だというのに、北の国はまだ雪が残っている。いよいよ我々千五百名は、晴れて解放された気分であちらこちらに分散して、私たち五名はまず北満孫呉に転属、七月一日北安に行く。二六三五部隊の出張で、班長さんはなかなか親切に、教育隊と違って親しくしてくれた。

私たちは下士官見習のため実習生としての勉強だったので、ここで技術一等兵に進級くださって二十日ばかりお世話になり、海拉爾ハラルに向かった。満州に入ってから西の方へ汽車に随分乗って北満の伊列克得。ここは山中、満鉄から十二キロばかり奥で自分たち皆で二十名の小隊だった。この周辺には第六十八兵器廠の弾薬倉

庫がたくさん建ち連なっていた。農場も広いし、満人の労務者百五十人ばかり。この歩哨に浅井四郎次君と交替で警戒に当たった。我々に与えられた九九式と実弾三十発の歩哨警戒で心細い任務だった。

八月十日の記憶だが、今日は昨日と違つて変な飛行機が何度となく飛んでくる。小隊長に報告。小隊長も、本隊からの命令で全員引き揚げろとの通信があつたので今夕満州鉄道本線に行くから準備しろとのことで、二時間くらいで準備が終わる。そこへ満人の道に迷つた一人の男が入ってきた。小隊長は俺と浅井に、この男を銃殺しろの命令にて、浅山に連れ込み銃殺した。かわいそうにと思つたが、もうこの時点で戦争状態に入つていたのであった。

終戦当時

その真夜中、この静かな伊列克得の興安嶺山中を出発したのだつた。満鉄本線を伝い歩き南下。隊長の話では二六三五部隊はたしか海倫・綏化といふところだったと思われる。集結しろとて昼間は山中で寝、夕暮れて鉄道に沿つた広い道を歩き南下。ソ連軍は十キロ

ばかり向こうに近づきつつあり、我々は走つたり助けを求めたりして木炭自動車でガタ道路を走つた。途中、一兵隊は爆弾の破片で体がバラバラになる。ようやく二日目の夕、海倫・綏化にたどり着いたが、ここで終戦の詔勅を聞いたのであつた。

我々の小隊は、少年開拓団のいるところに行くからと一時間の休憩もなく出発し、忘れたが西満行きの無蓋車に詰め込まれ、どこまで行くのだろうと話し合いながら、どこともわからないところで下車させられた。一体どこへ連れていかれるのか、まだ九九式銃は持っているものの撃つことはできず。そのころ、まさにソ連の歩哨がついていたが、あちらからも砲のものとすごい響き。話によると、日本軍はまだ終戦を知らずに戦っているようで、自分たちにしても、弾も持っていることだから思いきり戦いたい、撃ちたいの気持ちだが、戦いに敗れた、負けましたと骨の抜けた思いだから、どうすることもできなかったのである。

中国孤児

貨車をどの辺で下車したのか記憶はないが、その時

点から歩く（行軍）とあつて、長い土ほこりの道を先頭からは三百メートルくらいあっただろう。ここで、私がいまだに忘れることのできないのは戦争孤児の問題だ。

中国残留孤児はかわいそうだ、かわいそうだと言うだけではいけない。行軍途中、在外邦人たちの妻が子供三人を連れて、赤ちゃんを背中に、歩ける二歳、四歳の子供を腰にひもでつないで、手には荷物。八月中旬のこととて、暑さにまいった母親たちが、満人にせがみ預けた姿を何度も見ている。この子供たちはいま五十代の年になっている。お孫さんもできています。この方々は、日本人の母親から生まれ、戦争のために生き別れたのである。育ては中国の方で、今日まで五十年間もあの寒いところで育てられ、大変苦労もあつた五十年間だろう。自分自身がその身になったら、簡単に片づけてしまえる問題ではないと思う。

終戦後の行軍

話は横道に入ったが、一昼夜の行軍とあつて腹も減り、足が動いているのかわからない状態になってしま

つた。ようやく富拉爾基の病院に到着。ここでソ連の若い歩哨のもとで武器の返却、菊の御紋の入った銃と帯剣。関東軍の精鋭は一挙に骨の抜けた思いであつた。部隊は、何をほうつても飯を食わねばと炊事班はトラックから釜をおろす。まだ日も浅い八月二十日ころだつたと思う。が、食糧も三日分くらい大丈夫だと言つておられたが、富拉爾基で三日間滞在後、斉斉哈爾に向かつて行軍。これもまた重行軍とあつて、ソ連の歩哨に追い立てられて、中には脱落する兵もいたが、後を追ってくるトラックに乗せられた。

部隊移動は、斉斉哈爾の野砲隊。なかなか立派な建物で赤れんが一色、部隊名は不明。ここで一週間ぐらい滞在、毎日馬の肉ばかり食つて日を暮らした。一番うれしかったことは、十日ぶりで入浴させてもらったことが忘れられない。ここで一週間、ソ連の下士官たちが毎日のように歩哨たちと状況を見に来て、「ヤボンスキーソルダート・東京ダモイ」（日本の兵隊は東京へ帰るぞ）と言つていた。馬鹿やろう、そんなうそを言つて、なぜ西へ西へと連れてきたのか、だまされは

しないぞと自分たちは話し合っていた。斉齊哈爾を出発、やっぱり西方二十キロばかり歩いて扎蘭屯サラントンという地に到着。この辺は小高い山草原だが、鉄道路線で何もなく野宿だ。テント張り。何でこんなところにと思った。

毎日交代で使役に出るのだ。そこで鉄道路線の拡大作業だ。シベリア鉄道は満鉄に比べはるかに狭いので、その仕事と有蓋貨車の補修の使役だった。ここであるほどソ連には物資が少ないということが想像できた。自分たちは近くソ連に連れて行かれることを覚悟はしているものの、どこまで連れて行かれるのだろうかと話し合いながら、太陽が西に沈んでいくのを見る。

一番困ったのは水がないこと。夜になると大きな蚊が出てきて、殺虫剤なんかないのはもちろんのこと。兵隊は衣類にシラミを持っていない者はなかった。暦で九月の初めとて、ちらちら雪が降る日も少なくない。内地ではそろそろ稲の刈り取りが始まるころであるのに、我々はこんな行き先もわからぬところまで送られて、日本軍はアジア一帯をかけずり回り、内地にいる

ときは勝てる勝てる毎日放送されたニュースに国民は喜び、安心感を持っていたが、今日本は敗戦となつてどのようなことだろう、内地の故郷の現状は何一つとして聞くこともなく、お互いつらい心境の毎日であった。

貨車に乗り込む

いよいよ出発との声が聞こえてきているが、一個大隊とあつてはそうもいかなからう。炊事班の隣にはまきが無蓋の貨車に二杯、石炭の燃料も二杯たっぷり、これだけの積み込みをするのだから、モスクワに連れていかれることは間違いないと判断するが、今にも貨車に乗ろうかというのに十七、八歳の若い歩哨は「東京ダモイ」と言っている。ばかやろうめ、頭の程度がどうかしていると俺たちは笑った。貨車は中央にストープの備え付けも完了しているが、もう一つ便所の完備が必要なのに、この準備がないのはどういうことだろうか。何しろ一番不便なのは言葉が通じないことで、幹部方は手まねよりほかないが、我々のお世話をしてくださった。

貨車は時刻制がないと言われていた。夜中、いよいよ出発だと伝令が来た。テントの片づけから始まり、小隊の中に忘れ物なきようにと。今にも貨車に乗せてくれるのかと、寒い夜中待つのにつらかった。衣類は冬夏新調の衣服をリュックに入るだけ、靴も三足手持ちで新品ばかり。中には手持ちが苦しいため大分置いてきた者も。

もう東の空も明るくなってくる時刻だったでしょう。乗車が始まった。出発、長い列車は西へ西へと走る。二カ月前いたハイラル通過、ソ連領のチタを通り過ぎ、檜、杉の中を走る列車は、随分古い箱だから揺れる揺れる。十時間に一度ぐらいしか止めてくれないので用便することも困難で、止めてもらっても外から歩哨が開けに来るまで待たねばならん。線路脇には、先輩列車がもう何回も行ったのが大便でわかる。約二、三時間の停車。飯ももらったし、また出発。貨車一箱の人員は四十人ぐらいたったと思う。

二十五日間、貨車の旅

上と下、板一枚の狭い貨車の中で、一体どこへ行く

のか。第一日が終わり、貨車の中は戸締まりで暗くて字も読めない状態だった。一車両に頭を出すのが精いっぱいの小窓が二個あるだけだった。

外の景色を珍しげに交代で見ることが、三日目あたりからは眺めても珍しくもなく、子供心にオオカミが多いと耳にしたことがある。杉、檜の大木の中を列車は十時間ばかり走る。何とシベリア鉄道ってこんなものか、幾ら急行にしろ、満足な駅らしい駅もなく信じられない旅であった。

満州を去って一週間くらいになるだろうが、曆もなく、ただ牛馬同然のありさま。この送られている兵隊幾十万人は、皆自分たちと同然の気持ちだろう。箱の中に持ち込んでいたマージャンの遊びをやる上司たちもいる。退屈で昼も夜もなく、寝言を言って笑われる者、小窓から外の様子を見ながら報じてくれる者、ストーブの当番をしている者、リュックサックの中のものを出したり入れたり。毛糸を編む者、手細工をする者、さまざま退屈のぎのありさまであった。腹が減るのが一番の悩み。毎日粟のかゆ、千島から運んで

きたらしい。ニシンの干ばし、名のわからない干ばし魚が副食で、野菜は一切与えられなかった。

列車は牢獄同様、哀れな毎日。日本は神の国、戦争は必ず勝つと教わってきたのだが、今、反省してみると、時代の流れで、科学の発展には勝つことができなかつたことなど、眠れない貨車の中で反省の夢を見つつ、列車は相も変わらず走り続けるのだった。狭い箱の中で夜も昼もなく、毎日毎日どこへ行くともしれぬ閉じ込められた身。街らしきところだ、珍しげに教えてくれる兵隊、結構駅らしいホームに停車、ここはウランウデ。

前の方から伝令が、ここで入浴だ、準備をしておけとのことだった。一回に五十人ぐらいが歩哨に連れられていくのですが、歩哨は「ダバイ、ダバイ」と追いつてるのだ。そうかといつてバラック建ての浴場には五十人ばかりしか入ることができず、外は氷点下の状態、待つ時間の長いこと。順番が来て、小バケツのお湯一杯で垢を落とすのが精いっぱい、二杯目では、ゆすぎ。こんな入浴なんて初めて。それも十日ぶりです。

を洗うのだ。軍隊は昔からシラミの巢だと聞いてはいるが、抑留者は特にシラミと南京虫にまいつてしまつた。

職場が定められた

列車に戻ると、リュックサックに入れてあつた大切な品物が盗まれていると皆口々に言う。空き巣ねらいに遭つたのだ。「歩哨の野郎め」、兵隊は腹を立てても仕方がないこととて泣き寝入り。

列車は大休止してからまた走る。海が見えてきた。ここはバイカル湖だ。ここでは軍艦同様の船がたくさん見えた。湖も日本の本州と同様ぐらい大きい。満州を出て二十日くらいにもなろうかと思うが、行き先は言ってくれず、どこまで連れていかれるのだろうか。隣の貨車の連中も言っている。イルクーツクを過ぎ、クラスノヤルスクノボシビルスクをずっと南下、カザフ高原、天山山脈のふもとアルマアタ都市。二十五日間の旅。体もぐにやぐにや、体重も減少している。顔色も元気はさっぱり。しかし病気の気がなかつたのでよかつた。全員下車、しんみりと冷たいところだつ

た。一体こんなところまで連れて来られてと不安感がいっぱい。でも大ぜいの連中だから力強い思いだったが、再び内地へ帰ることはできないだろう。夜に月を拝み、故国の恋しい母を想う。母はいかにしているだろうか、我を待っていてくれるだろう、二人の男兄弟たちと互いに心待ちに。

いよいよ下車して二十分くらい歩いて収容所の門前に到着した。ここが我々の連れて行かれる目的の収容所だったのだな。員数を調べるのに一時間も費やして、自分たちに比べて頭の悪いのにあきれてしまった。翌日から第二収容所で、八百人とも言われていたが、はつきり覚えてなく、各勤務所に割付けなど、種々多用で忙しい毎日だった。この収容所内三十メートルに別棟がある。ドイツ軍の襲撃があつて天井が全壊しているのを職人の兵隊が一週間で立派な収容所にし、我々は喜んで入ることができた。まず職場を定められ、自分は（イモノ）鑄造工場に行くことになった。中隊長の詩司内務班長割り当てということで、鑄造工場とはいっても三百人ぐらいの仕事場のようだった。

ノルマ・パーセントの労働

仕事内容は、鑄型からハンマーでたたき出す仕事、私と今枝上等兵とソ連女工さんと四人の仕事。毎日ほこりまみれの力仕事。三十歳ぐらいか？の女工さんたちは、我々に劣らぬハンマーでの力仕事で、でも外は寒気氷点下何度。野外仕事のことを考えるとありがたいと思った。私は十五歳時分から熔解工の経験があつたためもあり、幸いにして室内作業を与えられたので、「ヤボンスキーソルダート、よく働く」と二人から誉められたが、若い自分たちにとっては腹が減るのが一番つらかつた。でも同一の仕事だから、精神的にかわいがつてくれた。

ソ連という国は、特に仕事のこと、人間は働く機械であると政府が言っている。それにしても、食を与えず仕事のノルマばかり言つて、たまつたものじゃない。一日に与えられるのは黒パン三百グラム、野菜の塩漬けのスープが飯盒の蓋に八分目。一回パン百グラム、時には粟のかゆ一杯だけ。これではハンマーなど使う労働ができる道理はあり得ない。ソビエトでは土地は

国有だから、売ったり買い求めたりすることはできないが、工場は権利を持っていると聞きました。だから、就職して定年まで勤めれば、自分の住宅になると言われていた。

いよいよ昭和二十年も終わり、二十一年正月だ。衆しみだった子供時代を思い出す。収容所では飯盒に七分目、ぜんざいが与えられた。常にお腹が減ってるので切ないほどいただいた。うまかったことが忘れられない。

時は二年目に入って、シベリアは寒いと聞いてはいたが、零下三〇度という日も少なくなかった。自分たちはシベリアに来て冷えるというのが初めてで、満州の気温は全く知らなかった。お陰で若い年配がものいうとあって、満州開拓者たちは赤紙一枚でこんな幾千里離れたところに引き連れられた。兵隊たちは口には出さぬが、いずれ取り返しつかぬ事件が発生すると言っていたのである。

二年目の夏ごろから、中隊長の指示により、私に職を代わってくれという。何だろう、ロスキーのコマン

ジュールから鍛冶屋の仕事に一人欲しいと言ってきたのです。これもまた面白いと返事をした。鍛冶屋さんは自分には経験はないが、よしやってみよう、ロスキーじいさんと二人で金槌の頭をつくる仕事だった。一日の目標四十五個で百%。「なかなか、三十個だよ」とじいちは言っていた。こんな小さな仕事でもノルマ達成がいかに厳しいかがうかがわれる。

鍛冶屋の小屋は工場の中心部で、道具はハサミ二、三丁とハンマー二丁だけ、火を起こすのは台湾ウチワという、日本では珍しく、見た方、知らない方も多いだろう。お粗末な仕事場でじいさんは大変変人で、機嫌をとるのが大事。金槌をつくるのは四十個、翌日に隠しておいて員数を増す。「ソルダート出口、なかなか頭ハラショー」と誉めてもらった。

仕事は四時三十分が終わって工場前に整列するが、西に太陽が沈む。シベリアの日は短いので朝星夕星で、明るい一日の景色は知るよしもなかった。ラーゲルに帰っても何することなく内地の話ばかり。我々はこんな遠い所に送られて、いつまででいるのか、明日のこ

と、先のことは不明だと、面白くない話。ともに力をつけて生き抜こうじゃないかと励まし合う毎日であった。

栄養失調で死んでいった

いよいよ二十一年の暑い夏が訪れた。工場に通う白樺の木の下にれんがに似た色が毎日のように見えるのを黒パンと覚え込んでいた。これも人間が空腹を感じる脳の働きだろう。でも、五月、六月となると内地と違って一斉に草木が出てくる。ホウキ草、アカザ草、兵隊はボケツトにやたらと摘み取りラーゲルに持ち込み、飯盒で煮て腹をふくらます。岩塩で味があり、私も再々食ったがおいしかった。中には暗いところで選別したせいも、一番恐ろしい毒性の多いシベリアの毒草を食って命を失う連中も度々いた。その夏、私もシラミのせいも、アメーバ赤痢が大流行して、入院一週間の診察で、入院どころか命が危ない病人の看護をさせられた。毎日五、六人ずつ死去していくありさまだった。

この私たちの埋葬はいつもどこへ運ぶのだろうか、

故郷に置いてある妻や子供たちが待っているだろうと思うと、本当にかわいそう。赤紙一枚でこんな遠いシベリアに二十五日も貨車に閉じ込められ、つらい毎日、ダバイ、ダバイと追い立てられて、今日の命が明日は他界と、このみじめな身をだれが知る。飢えと寒さで野外仕事の連中の死亡率は非常に高かった。シベリアは正直いつて春と秋はほとんどなく、夏は暑い四カ月、冬は七カ月、世界一高い天山山脈のふもとだったので、夏でも頂上に雪が残っているありさま。ソ連の連中に聞くと、アルマアタ地区はよいところだよ、気候風土に恵まれているところだ、ハラショーと言われていたが、私たちにとって氷点下三〇度というのが珍しくもないシベリアであると思った。シベリアに来て、笑顔一つする者ない。明日の楽しみがないからである。満州にいた邦人合わせて何十万とも知れぬ人が二日、三日の間に俘虜になってしまったのだから、前文に申したように、日本は敗戦した、後悔してもだめだ。アジア一帯の何百万人ともいわれる我々同胞の心境も同じことだったろう。

しかし、私は忘れられない。ソ連という国は終戦の

五、六日前満州に侵入、数々の暴虐を行い、その上に居留民合わせて全員強制連行し、衣食の準備のないまま、千二百カ所に及ぶソ連全土の収容所に抑留したのである。飢餓と酷寒の中でソ連の復興建設労働に強制的に就かせられたのである。戦争が終わると同時に、米国、英国、中国はポツダム宣言を忠実に守り、米国は二百九隻の船舶で海外の日本軍民六百六十万人を昭和二十一年中に内地に送還されたと言われているが、我々千島、満州、朝鮮にいた連中は根こそぎシベリアに二年から十年もの間抑留され、栄養失調で六万以上一説には二十万近く死んでいったと言われている。

アメリカ赤痢もどうか忘れてきたころ、夏でしたが、れんが工場に変わり、この作業も大変な仕事だったが、夜の仕事で、歩哨の目を盗んでサボることができた。山の土でローラーから出てくるれんがをトラックで広場に並べる仕事で、乾燥できたれんがは囚人方の昼の仕事へ申し送るのであった。周辺にリング畑があり、まだ十分とも言えぬが、盗んできて食べ合つて

腹を膨らませた。

ソ連は泥棒が多いそうだ

早朝、ラーゲルに歩哨に連れられて十二、三人の少人数で一カ月ばかり通つた。このれんが工場の次に、たばこ工場に変わり、これも二十名ばかりだった。退院者がほとんどで、軽作業、葉っぱの選別で楽だった。工場は若い女工員たちと遊び半分で、ソ連に来て初めてこの仕事が楽しかった。

たばこの切断粉末を、女工のいないすきを見て防寒外套のポケットの底を外して、一キログラムばかり持ち帰つた。それを元鑄造工場に通つていた友人にパンと交換するカルーブルで売るかして、盗み商売をやつたものだ。ソ連では盗みの現場を見られない限り罪にはならないそうだとされている。

だから、鑄造工場に行つていた当時も、班内に帰つて、きょう何々を盗まれたとか言つていたが、飯盒を盗まれたのが一番嘆いていた。自分たちの命をつなく食器がないことが一番つらかった。ソ連の道を歩く人々は、日本ソルダートが腰に缶詰の缶をぶら下げて

いるのを珍しげに眺めている。

時は昭和二十二年正月が来ようとしている。酷寒の下、三度目のシベリア、ラーゲルではみんな何を話し合っていることだろう。大阪の野田屋の羊かんをもう一度腹いっぱい食つてみたいなあとか、めおとせんざいはうまかったなあ、食うことが第一と、早く帰りたいなああの二つの話だけで、きょう一日の反省話は余り聞くことはなく終わっていった。この過ぎし五十年前を振り返つてみると、本当にこんなことがあったのですよと子供や孫、子孫に言い残したいが、当時の事實は文章で書くしかないのです。だから、抑留記を一生懸命大切にしていたのだと思いつつ書き続けているのです。

ダモイと診断された

シベリア、アルマアタに来て珍しいことが二つ三つあった。街外れを歩くきれいな娘さんが手鼻を上手に飛ばす姿は日本では見たこともなく、ソ連人は人前でもツバを勢いよく飛ばすことが珍しくない。この地区は共和国というだけに、人種の多いことが特に目立

つ。蒙古人の多いこと、こんなところに朝鮮村が存在しているとは夢にも思わなかった。

街を離れ、我々の仕事場へ行くソ連の人たちとは全く触れ合うことはできなかつた。それというのは、マンドリン銃を持った歩哨が目を離さないありさまだからだ。私のラーゲル生活は二カ年だが、アルマアタへの往復五十日間は、貨物の生活だった。たばこ工場は本当にハラショーだった。二十二年に入つて食糧事情もかなりよくなつたが、栄養度は依然悪く、栄養失調のため、年配者の方々の体力が衰えてきたため、月に一回、女医の身体検査が行われた。自分は失調一歩手前だったが、ニエツトハラショーと診断され、ダモイ(帰ること)の仲間に入つて、そのうれしさが忘れられなかつた。しかし、ダモイの診断を受けた私たちには一向に通達もなく、また常にだまされているから信用はできないと思つていたが、後日急に中隊長から命令が来て、うれし涙にくれた。帰れる名簿の中に入つていたので。

自分たちのダモイは中隊で第二回目だと言われている

た。私の場合、約二カ年アルマアタで、ほとんど変わらなかつたことと、寒いシベリアでの昼間は火の仕事ばかりだつた。同じ中隊の兵隊たちは酷寒での仕事はほとんどだったので気の毒だつた。私は不幸中の幸いだつたと今、昔を思い出して喜んでゐる次第です。帰ることが決定されたのは中隊で百人と言われていたが、貨車の都合にて四キロばかり離れた小さな収容所で一週間ばかり休養させられてゐる間に三人ばかり死去された。今思うと、年齢の差と、人間はもう気楽になつたという安心感、それと大切なのは氣力感、「病は氣から」と昔からの言葉がありますが、そのとおりだと思われる。

いつまでも階級制度が続いた

腹が減つた、帰りたいのことはかりだつたが、念願がかない、初めて笑顔が浮かんだ。今度の貨車に乗る顔ぶれは各ラーゲルからの混成だつたので見知らぬ方が大ぜいだったが、帰れるうれしさで氣分が浮き上がつて、楽しいダモイ列車に乗つたのであります。約二カ年のラーゲル生活を話し合う、混成列車だつたので

一日の日暮れにも退屈は知らなかつた。数々の思い出が胸いっぱい、話し合いが山のごとく。私のラーゲルの生活から比べてみたら、他の方々の苦勞が大きかつたと感じた。話によると、森林の伐採作業は口や筆で表せないと言つてゐた。ラーゲルというが家もなく、木の葉っぱをふとんがわりに寝た話も聞かされた。

列車はシベリア鉄道を東へ東へと進みつつ、一日に二度ばかり停止。めし上げの便、整理本部からの伝令あり、「今より二時間ばかり休停車あり」、またも出発の折りに伝令、下に来るまで言葉が変わつてゐることもあつた。そうして、列車内では見知らぬ兵隊が多く、語り合つたが、私の抑留は運がよかつたか、わりかた楽な部だつたと感じた。でも、外部の土工作业の連中は大変だつたらう。人間が氷点下四〇度の中、朝から夕方まで作業することはちよつと考えられない。年配者にとっては体力の限界がある。だから、恐ろしい凍傷と栄養失調が重なつて、朝、目が覚め「おおい、起きないか」と言つたが一向に返事がなく、そのまま他界していった。私も当時、名前も住所も聞いていたが、

つい五十年も過ぎ去った今、忘れてしまつて、ご家族に対して申し訳なく、ご冥福をお祈り申し上げるほかございません。

ダモイ列車に乗った元兵器廠二六三五部隊の兵隊がどれだけいたのか不明だった。うちの部隊はラーゲルの民主運動が始められて約一カ年ばかりだったが、いつまでも階級制度が続行。昔の軍隊ではないのだから階級制度をやめるのは当然ではないかという声も高かったが、まだ続行していた。「捕虜になったらみんな同一だから」は自分たちが常に言っていた言葉だった。残留の方々はひどい目に遭っているだろう。ソ連に来て、人間の食べる食物でなかつたこと、酸っぱい黒パン、雑穀、高粱、粟、燕麦、豆類などで、それもおなかはいつも四分目だった。よし、帰ったらおなかいっぱい食つて体力をつけなければという楽しみが近づいてきた。

ウラジオストック、ナホトカ

ダモイ列車がシベリア本線に入つて随分となる。でも今度はウラジオだ、歩哨もウソは言わないと、我々

栄養失調の同僚ばかりだから信じていた。

いよいよウラジオだ。下車伝令が来た。兵隊の顔色も少し元氣づいているものの、やせこけていた。二カ年の精神的労苦と疲労が重なつたためである。ナホトカの浜にテント張りで、お先に來られた兵隊たちが、もう三日たつが、まだ乗船させてくれないとのこと。ここでソ連の共産主義の教育を十分にたたき込まれるそう、昼も夜もインターナショナル合唱、これに反する者は再度送り歸された兵隊も大ぜいいたとやら。

お陰で我々は、五日間ぐらいで乗船することができた。日本海に出迎への「恵山丸」という大きな字を眺めて、うれしくて涙が出たのだった。みんなが喜びの声をあげ涙を浮かべたことだろう。汽笛が鳴り響いて遠ざかる。ソ連を後にして明日は我が故郷へと喜び勇んで。船は貨物船だったが、玄界灘と違つて静かな日本海に。夜も一睡もしなかつた。

しかし今思うに、ナホトカ乗船のとき、ソ連の幹部が員数を何度も読み、間違ひなしと太鼓判を船員についた。我々みんなその覚えがあると思うが、夜明けに

舞鶴湾に近寄つて、緑の島、懐かしい内地だ、小躍りしてうれしがった。今も忘れることはできない。しかし、朝、沖に到着したのに舞鶴港に入らない。同僚たちもうれしい気持ちはみな同じだが、船内からの言い伝えでは、昨日ソ連からの申し送りでは何人だったのに、今朝二人足りないとのこと、上陸が何時間も手間取ったのである。実はソ連抑留中、階級制度でいじめた方が夕べ海にほうり出されたらしいという話も聞いた。自分たち一等兵にとっては当たり前のことだとも思うが、また考えようによっては、ここまで来て舞鶴に上陸できないとは残念なことだ。

目の前に懐かしい三年ぶりの青々茂った山が特別にきれいだった。引揚棧橋を渡ると、日本婦人会のたすきをかけた大ぜいの方々が出迎えて、「長い間ご苦労さま」と握手。このときのうれしさは五十年前のことだが、忘れることはできない。時は昭和二十二年六月十三日であった。

いよいよ本土に上陸

長い疲れに細った体を大浴場に入れてもらったこと、

帰れるうれしさで汽車に乗り、どの軌道で帰ったか忘れた。運賃、めし代金で三百円也をいただいた。これは大金と驚いたが、物価の高いのにも驚いた。時は昭和二十二年六月十五日、自宅に帰ったが、父母がびっくりしたことから、近くの姉の家で、両親はうれし涙で出迎え、ようこそ帰ってくれた、兄は二十年四月にピルマの激戦で戦死したというその一言に私は胸を打たれ、悲しみに耐えられなかった。

でも、家族、親戚の方々が元気でよかった。農業をしながらも衣食住は配給制度が続いていたが、負け戦のどさくさで我々は体だけを守ってきたのだから、どんな苦労でもして立ち直らねばと、ついシベリア生活を思い出して働いた。復員後、二十四歳で結婚、妹三人も嫁にもらわれ、現在息子三人に孫二人ずつ六人おり、幸せな生活ができて喜んでおります。

私の経歴は、二十三歳より農業をしながら、柑橘出荷業経営三十年間、その間、保険外務員五カ年、育友会長五カ年、地域役員四カ年、関西相互KK嘱託十五年、企業連合会十六年、熊野神社総代五カ年、小学校

同窓会長八カ年で現在に至る。当年七十歳になりました。四年前、慢性肝臓にて診察の結果、肝臓がんとわかり六〇%切除、結構回復して元気になり、楽しい日々を送ることができるようになりました。読んでくださった方々も、シベリアの労苦を思い出して、世の中も変わったのだから、一日でも幸せに元気で送られることをお祈りいたします。

目が覚めて 見れば嬉しや 今日も又

此の世の中の 人と思へば

【執筆者の紹介】

出口氏は、大正十三年六月一日、和歌山県日高郡野口村の農家の兄弟姉妹十人の中の次男として生まれました。

昭和二十年三月、満州第二三六五部隊に入隊したが、同年八月ソ連軍により武装解隊され、同年シベリアの現カザフ共和国アルマアタ収容所に入れられる。

鑄造軍需工場にて約二年余り働かされ、体が衰弱し労働不能になったために、昭和二十二年六月帰国が許

されました。

出口家の長男が戦死したため家業を継ぎ、昭和二十三年より農業経営をしながら、みかんの出荷業を始め現在に至っております。

(和歌山県 久保 清三)

日ソ交戦・抑留記

北海道 十和田 善作

昭和十八年一月十日、在満要員として旭川歩兵二六連隊速射砲中隊に入隊。同年三月末、満州より迎える教官班長に引率され、満州東安省西東安歩兵二二連隊、通称八八部隊に転属。歩兵二二連隊は四国松山市の勇猛連隊で、初年兵係班長教官を除く他の幹部下士官、将校は、全員松山市を中心とした四国出身者。

渡満してより六カ月、初年兵教育、九月にて一期終了。終了後幹候試験あり。同集会教育に参加し、昭和十九年二月五日甲種幹部候補生として、連隊の同僚十